

E-6 拡大家族の住居観—その1. 女子短大生の同居観

広島工大建築〇西川加祿、広島県庁観業改良 日野勝子。

〔目的〕住居計画に際し、家族構成は重要な要素であり、その住要求も多様なものとなる。特に拡大家族に於ては家族構成が複雑であり問題点も多い。女子短大生は将来結婚して親との同居についてどう考えているかを調査し、今後の動向資料としたい。

〔方法〕質問用紙を配布し、同時に回収した。対象数87名、調査日は昭和46年6月。

〔結果〕出身地域はほとんど広島県内、家の職業はサラリーマン家庭54%、自営(農業も含む)36.8%。住居形態は都市住宅51.7%、農家住宅46%である。現在両親かそのどちらかの親(学生からは祖父母になる)と同居している者35.6%、同居形態はその74.2%は同棟別室型である。また同居している祖父母の両方健在はわずか9.7%におぎなり、80.6%は片方のみが、病弱である。住生活に於てトラブルの多い同棟別室型が多いと云うことは、この老夫婦のどちらかの欠損による子供夫婦家庭への吸収の型をとったとも考えられる。次に将来の同居観について分類しデータをまとめると、(1)賛同型—20.7%、(2)雷同型—58.6%、(3)逃避型—19.5%、(4)無関心型1.2%、となり、(3)の別居への志向型が意外と少なかったことに安堵をおぼえた。特に都市部の住宅事情を考へあわせると、核家族化の急激的傾向は居住者の意志と云うより社会的要因に押し流されているところか強いと考えられる。又、同居する場合、住居形態は別棟—50%、同棟—50%となつてゐるか、まだ実感として捉え方が弱りようである。今回の調査に於て、今後の住居形態の一つの指標として、女子短大生の意識調査を行ったのであるか、新しい拡大家族の住まい方を展開させるべく、調査対象を拡げて行きたいと考えている。